特別賞

木の大切さ

高輪台小学校　矢島　潤一

ぼくは、「木」と聞くと学校にある一本の桜の木がおもいうかびます。その桜の木はぼくにとって大切なそんざいです。桜の花が満開になるのは、ちょうど一学期の初め、ぼくにとっては「友達がつくれない」など、なやみごとが多い時期です。そんななか、桜の木を見るとはげまされます。ぼくは桜の木を見て「きれいだなぁ」「きもちいいなぁ」と心がホッとします。そんな桜を見てぼくは、毎日はげまされるのです。

木はぼくたちの生活にとって大切なそんざいです。たとえば、ぼくたちが生活している家、今この作文を書いている紙などは、すべて木からできています。これらの物は、ぼくたちが木といっしょにくらしているからこそ生まれた文化です。

ぼくはこの作文を書いてみてわかったことがあります。それは、大切な木があるときにはそのよさに気づくことは少ないが、なくなると大切なそんざいがわかる、ということです。焼畑もその一つです。緑がなくなってから気づくのはおそいのです。そのため、みんなに木の大切さを知ってもらう必要があります。木はいろいろな環境問題を解決する上で大切な役わりもありますが、山で「緑のダム」の役わりをし、その地域から、山くずれやこう水から守る役わりをしているということ、つまり木が自分の生活している地域を守っていることをぼくは知ってほしいのです。

木はぼくたちを守ってくれています。では、ぼくらは木になにかしてあげているのでしょうか。悲しい事ですが、木を切りすぎていることに気づいていない人が多いのです。今回のタイのこう水も、そのことが理由の一つになっています。その人たちはまだ、木の大切さをわかっていないのです。ぼくはその人たちに、いや木へのおんがえしのためにこれまで書いてきた「木の大切さ」を教え、「木へのおんがえし」という行動にかえていただきたいのです。

と書いてみましたが、言葉で言っても、行動するのはむずかしいものです。そこでぼくは一つの案を思いつきました。木をむやみにばっさいする人、焼畑をする人たちに、木や森に親しんでもらうのです。するとその人たちは自然に「木の大切さ」がわかります。そしてその人たちは、「私たちは木を守り、まだわかっていない人々に、木のすばらしさを教えてあげよう。」と、思うはずです。